

研究ノート

近代合理主義批判の諸思想

——アイザイア・バーリンの所説をめぐって——

多田真鋤

目次

- 一、はしがき 近代合理主義と機械文明
- 二、G・ヴィーコについて
- 三、J・G・ハーマンについて
- 四、J・G・ヘルダーについて
- 五、あとがき

一、近代合理主義と機械文明

近代合理主義思想は、一五、六世紀におけるヨーロッパの二大精神革命ルネッサンスとリホーメーションによって、その思考様式の端緒が形成されたのは周知のところである。

すなわち、一連のルネッサンスの動向によって、いわゆるフマニスムス（人間本位主義）の思考様式が発現されてくる。フマニスムスとは、神や絶対者や、人間以外の力を必要としない、人間の理性によってのみすべてを律しきれるという思考なのである。そしてまた、ほぼ一〇〇〇年間の中世ヨーロッパ世界を支配した中心的な精神構造であった神の攝理 (Providence) から人間理性 (Ratio) へと、ものの見方、考え方が一大転換を来たことによる。

表現を変えれば、神信仰から理性信仰へと転換したのであった。中世ヨーロッパは主としてキリスト教の神の攝理によって統合せられていた。自然界（宇宙）と人間界（社会）を統合し、秩序づけているのは神の攝理であった。ルネッサンスとリホーメーションによって神の攝理から人間理性へと漸次的に移行したのである。ルネッサンス期に発現した人間理性の思考は、一七世紀デカルト (René Descartes) の哲学の出現によって、物心一元論 (Animism) 的自然観や人間観から、機械論 (Mechanism) 的自然観や人間観へと決定的転換が成就された。デカルト以降の近代思想史は、合理主義、主知主義、理性論、機械論的思考が中心となり、ホッブス、ロック、ルソーの合理主義的社会契約論、カント、フィヒテ、ヘーゲルのドイツ観念論、コントの実証主義世界観、オーエン、サン・シモン、フリーエの初期社会主義思想、マルクス、エンゲルスの史的唯物論、と展開し、さらにこの没価値的科学認識は一九世紀には人間社会を対象が移行して社会科学 (Social Sciences) が形成されてくる。一八世紀イギリスに起った産業革命は、いわゆる近代機械技術文明の発端となり、以後二五〇年余の世界史は合理主義思想と機械技術文明によって推進され

てきたのである。この間ドイツの特異な哲学者ニーチェ (Friedrich W. Nietzsche) は、ビスマルク体制下の合理主義、現実主義、功利主義、機械文明等々を憎悪し、「反時代的考察」を著して批判したが、滔滔たる合理化の流れには抗しきれず、異端の思想家として名をとどめた。

第一次世界大戦終了の一九二〇年代に入ると、機械文明の突出に危機感を抱いたヤスパース(現代の精神状況)、ハイデッガー(存在と時間、技術文明批判)、シュペンゲラー(西欧の没落)、トインビー(歴史の研究)、シュバイツァー(文化の没落と再建)等々の哲学者や歴史学者らは異口同音にその異常性に警告を発したのであったが世紀の流れはそれらの警告を無視し続け、二つの世界大戦、戦後の冷戦体制を通じて地球環境の汚染をはじめ、現代の破局ともいべき事態を現出してしまった。すなわち、二〇世紀は「科学の時代」という標語に幻惑されて、科学的とは正しく確実なことという、科学的合理の思想に懐疑を抱かない思潮が主流となり科学の世紀を形成してきてしまった。前述の二つの大戦と冷戦状況がこの思潮を確実にしたことはいうまでもない。近代合理主義哲学の「二値論理」と「自然因果律」の一元化によって、医学を含め自然科学の各部門はとどまるところを知らない発展をしめしてきている。

自然諸科学の各部門におけるこの発展が、人類に限りない恩恵を与えてきたことはここに論ずるまでもない。しかし、この近代合理主義の思惟の論理によって、人間実存のすべてを律しさるということは、二一世紀を迎えたいま、反省さるべき肝要事であると私は考えている。「近代の偽善性や社会関係および自然環境の崩壊を生み出していくその根底には、合理主義という名の『精神の無機質的傾向』がある。科学・技術への絶対的信頼や経済効率最優先の神話のために、いかに環境が瀕死の状態におかれたか、地球的規模での人間関係がいかに危ういものになっているか。

これらをもたらしたのは、われわれ自身のなかの共存への生活意識の欠落、すなわち無機質化した精神にほかなら

ない。」との山本雅男氏の指摘は傾聴に値するものであろう。(1)

また、この近代合理主義思想、近代主義的思惟の論理について、この論稿で取扱うアイザイア・バーリン (Isaiah Berlin 1909～1997) は次のように指摘する。

「進歩と文明を支持するすべての人々 (合理主義者：筆者註) にとって、多かれ少なかれ共通の信念がたしかに存在していた。共通の信念とは次のような確信である。世界ないし自然は単一の全体であり、ただ一連の法則にのみ従っている。その法則は原理的に人間の知性によって発見できる。無生物界を支配している法則は、植物、動物および有情の存在者を支配している法則と原理的には同じである。」といい、合理主義思考における科学的法則認識を指摘する。さらにバーリンは「人間の本性は時と所を問わず根本的に同一である。地域や歴史による違いは、不変の核心部分に比べれば些細である。この核心に注目することによって、鉱物、植物、動物の場合と同じように、人間存在を単一の類として規定することができる。そして、人間の行動を支配する数々の一般法則を発見し、これらを明晰かつ論理的に学問の体系に統合することができる。たとえば心理学、社会学、経済学、政治学、その他の体系にである。こうして数々の一般法則が、発見可能な全事実に対応する膨大な知の蓄積のなかで、適切に位置づけられる。このような知のありかたが結果として、あて推量、伝統、迷信、偏見、ドグマ、幻想、にとつてかわるだろう。……啓蒙的合理主義の伝統を最も強力に支えた柱石は、三つある。第一に理性への信頼である。つまり法則や概念からなる実証ないし検証可能な論理的結合構造への信頼である。第二に、人間の本性は時代を貫いて同一であり、人間にとつて普遍的な目的が存在しうるといふ信念である。最後に、第一のものを手段として第二のものを達成しうるといふ信念である。すなわち論理ないし経験を道しるべとする批判的な知性の能力によって、心身の調和や進歩を保証できるという

信念である。知性は原理的に、万物を究極の構成要素へと分析し、それらの相互関係を発見し、それらを規定している単一の法則体系を見いだすことができる。

このような能力によって知性は、真理発見を意図する明晰な心に浮かびうるいかなる疑問にも答えを与えることができる、と考えられたのである。⁽²⁾とのバーリンの見解は、まことに啓蒙合理主義の思惟構造についての的を射た解説である。本稿においては、ヴィーコ、ハーマン、ヘルダーの三人の反合理主義思想家らの思索をバーリンの所見に従って論考してみようと思う。すなわち、一七世紀デカルト哲学の全盛期に、これらを徹底的に批判したイタリヤ・ナポリの思想家ヴィーコ(Giambattista Vico 1668-1744)・カントとの交流もあり、北方の賢者(Magus in Norden)とも称され、合理主義批判に徹したハーマン(Johann Georg Hamann 1730-1788)・ハーマンを終始一貫敬愛した歴史哲学のヘルダー(Johann Gottfried Herder 1744-1803)を次の各章においてそれぞれの思索の一端を瞥見してみようと思う。

本稿で対象としたバーリンの著作は次のようなものである。出版年代順に列記してみよう。Vico and Herder, *Two Studies in the History of Ideas*. 「小池訳ヴィーコとヘルダー、一九八一年刊」、*「バーリン選集3」*、福田、河合編 *ロマン主義と政治*、一九八一年刊、「Conversation with Isaiah Berlin. 「I・バーリン、Rジャハンベグロウ河合訳」ある思想史家の回想、一九九三年刊」、*The Magus of the North, J. G. Hamann and the Origin of Modern Irrationalism*. 「奥波訳 北方の博士J・ハーマン—近代合理主義批判の先駆—一九九六年刊」*The Roots of Romanticism* 「田中訳 バーリン・ロマン主義講義二〇〇〇年刊」以上のアイザイア・バーリンの著作以外に次の二著を参照した。川中子義勝著「ハーマンの思想と生涯、一九九六年刊」、磯江景孜著「ハーマンの理性批判、一九九九年刊」

註

- (1) 山本雅男著「ヨーロッパ近代の終焉」一九九二年講談社現代新書二二八頁参照
(2) I・バーリン、奥波一秀訳「北方の博士J・G・ハーマン―近代合理主義批判の先駆―」一九九六年みすず書房刊、三八―四〇頁参照

二、G・ヴィーコについて

一七世紀ヨーロッパの哲学思想界は、フランスのルネ・デカルト (René Descartes 1596-1650) の合理主義の哲学によって支配され、その物心二元論 (Dualism) 一値論理に基づく分析的思考が主流をなしていた。デカルトの死後ほぼ半世紀余、ナポリ大学の一隅からG・ヴィーコはデカルト及びデカルト学派の機械論的分析思考に対し、「われわれの時代の学問方法について」(De Nostri Temporis Studiorum Ratione 1709) の講演を以て、哲学と歴史の統合、法、慣習、宗教、言語の調和のうちに、あらゆる知識の総合の必要を主張した。⁽¹⁾
すなわち、知識の修得とともに英知、洞察 (Sapientia) の重要性を説いたのである。

ヴィーコはその自叙伝において「ルネ・デカルトがもつぱら自分の哲学と数学を確立せんがために、また神学および人間的知識を完成しようとする他のすべての研究を打倒せんがために、自分の研究方法に関して狡猾に捏造した事柄が、この自叙伝で捏造されるようなことはないであろう。」と正面からデカルトに対決している。⁽²⁾ デカルトやそれ以後の近代合理主義者の思考方法は、限りなく高度な数理的厳密性を探究してゆく態度であり、この思考方法 (Dei-kweise) が、学問をますます近代化し、高度化し、精密化してきたことに誤りはなく、マクロとミクロの世界を精査

に探求し、人間の内外の物的条件の研究をすすめてはきたが、複雑多岐にわたりまた多種にして多様多面な、微妙にして曖昧模糊としている人間現象の側面は容赦なく切り捨てられ顧みられることはない。ヴィーコは、その初期の著作「学問の方法」と晩年の労作「新科学」(Scienza Nuova)等において、このデカルト流の数理絶対主義、数学至上主義ともいうべき認識方法、さらにまた生命体を機械論的にとり扱う思考(動物機械論)に対して、人間の生活現象や歴史の展開は数理的合理主義のみでは律しきれないものであると主張したのである。

私も社会的人間現象は、人間そのものの精神、意志、感情、欲望、生活慣習等々の複雑多様な要因が混在しながら成り立っているものであり、歴史現象はこの人間現象が世代にわたって重層的、重層的に展開しているものであると考えている。中央公論選書「世界の名著 ヴィーコ」の責任編集担当者清水幾太郎氏も、「見境もなく高度の厳密性を求めて行くという態度であれば、なるほど、人間の内外にわたる物的条件の研究は進むかもしれないが、人間という複雑で曖昧なもの、そういう人間が作り出す歴史という捕えどころのないリアリティ、それらは最初から学問の対象としての資格を失うであろう。数学の理想や方法を人間の世界に持ち込んだ場合に得られる厳密性の外観という栄光は、それによる人間的歴史的な実質の喪失という犠牲を伴うのである。」⁽³⁾と、ヴィーコの立場に理解を示している。

バールンは、「ヴィーコがデカルトに反抗したのは、明晰にして截然たる観念というデカルトの基準は、数学及び自然科学の領域の外では、適用しても利益がないという確信であった。デカルト学派によれば、真の知に到達する図式は次のようになる。まず若干の明らかなる真理があり、それらは極めて明晰にして截然としていているから、反対しても荒唐無稽に陥るだけだ。さて、これらの真理から出発して、厳密な演繹の規則に従って、いくつかの結論に達する。それらが真実であることは、数学の場合と同じように、それらが異論のない永久の正しい前提から、演繹と変形との鉄則に従って生れて来たことよって保証されるのである、と。このモデルが、今日いわゆる人文諸学の分野に適用

できないことは、ヴィーコには明白であった。」⁽⁴⁾と、さらに他の論説においては、「ヴィーコはその生涯の労作『新科学』(Scienza Nuova)のなかで、デカルト学派の人々は数学の役割について大きな誤りを犯し、数学が科学の中の科学であるとしたと極めて独創的に主張した。数学は人間の思考の産物であるという、ただそれだけの理由なのであって、デカルト学派が考えるように、現実の客観的構造をそのまま現わすものではない。数学の助けをかりて、われわれは規則正しい現象(外界における現象の生起)を図に表わすことができるが、なぜそのような現象が起きるか、その目的がなんであるのかは分らない。それは神のみが知る。」⁽⁵⁾と、ヴィーコの思索を指摘する。

さらにバーリンは、ヴィーコ思想、その歴史哲学に胚胎する積極的な命題を数項目に列挙して解明する。その概要を筆者の表現を以って記述すれば次のごとくである。⁽⁶⁾

一、人間の本性は、動的、可變的なものであって、合理主義者の指摘するような静止的、不可變的なものではない。

二、人間は自らの歴史を創造するのであるから、その歴史を理解はできるが、外的自然の世界は人間が創造したものではなく、単に観察し解釈しているにすぎないから、人間自らの経験や活動を理解しようには理解しえない。

自然の世界をすべて理解しうるのは神(超人間的存在)の所業によるのみである。

三、それであるから、歴史的、社会的世界に関する知識と自然界についての知識は根本的に峻別されなければならない。自然的世界についての知識のモデルを、人間的世界(歴史世界)に適用しようとするデカルト一派の思考は必然的に誤っている。すなわちヴィーコは、自然に関する学問と人間に関する学問との間に、外的世界の観察と自己理解との間に、またそれぞれの目標・方法・可知度について明確な一線を画したのである。この二元論はそれ以後、絶えず熾烈な論議の主題となった。

四、人間の創造したもの―法律・制度・宗教・祭儀・芸術作品・言語・歌謡・礼儀作法など―は、人を喜ばせたり、智慧を教えるための人工的産物でもなければ、人々を支配し、社会の治安を促すために故意に作りあげた武器でもなく、自己表現であり他の人々や神と意志を通ずるための自然の形式である。……このように考えると、太古の人びとや彼らの世界を理解する道は、彼らの精神に入ってゆくこと、彼らの表現方法―その神話・歌謡・舞踏・言語形式や慣用句・結婚、葬礼の祭儀など―の規則と意義とを知ること以外にはない。太古の人々が生きるよすがとしたものを理解することが肝要であるとヴィーコは言う。

五、従来の伝統的な知識の二つのカテゴリー、先験的∥演繹的と帰納的∥経験的に加えて過去を再構成する想像力という新種を加味しなければ歴史認識は不備である。この想像力という知的活動は、他の文化の精神生活に、さまざまなものの方や生き方に「参入する」ことによつて生れる。それは想像力 (fantasia) の活動によつてのみ可能なのである。ヴィーコは過去を再構成するに際しての「想像力」の重視を唱える。以上の諸点がバーリンによつて解析されたヴィーコの論旨の要点である。

註

- (1) ヴィーコ・上村、佐々木訳「学問の方法」一九八七年岩波文庫二〇〇頁参照
- (2) 「ヴィーコ自叙伝」福鎌忠恕訳、一九九〇年法政大学出版社出版局四〇―四一頁参照
- (3) 清水幾太郎責任編集「ヴィーコ」昭和五四年中央公論社刊一六―一七頁参照
- (4) I・バーリン、小池鈺訳「ヴィーコとヘルダー」一九八一年みすず書房刊四六―四七頁参照
- (5) 福田敏一、河合秀和編「ロマン主義と政治―バーリン選集3」一九八四年岩波書店刊四八頁参照
- (6) I・バーリン、小池訳「前掲書」一三一―一八頁参照

三、J・G・ハーマンについて

一八世紀の北ドイツ、ケーニヒスベルクで孤高の思想家として、啓蒙、合理主義思想に真向うから対決したハーマン (Johann G. Hamann) もまた、ヴィーコやヘルダーと同様に、アイザイア・バーリンによって現代に蘇生してきた思想家の一人である。頑固なまでに合理主義それ自体を拒絶したハーマンは、ゲーテ、カントと同時代に在りながら、近代の思想史においては省みられることなく、歴史のなかに埋没してきたといえよう。ドイツ文学史におけるハーマンの項目において、「北方の博士ハーマンは、『詩は人類の母語』であることを唱え、人間本性の内でも非合理的な感情と想像力を理性の分別以上に重んじた。これによって彼は、内的世界の新たな像の蘇生を文学の課題として提示し、後に続き疾風怒濤から天才の時代を予言する先駆者の役割を果たした。そのような活動を支えたのは彼の深い宗教性であり、これによって啓蒙主義の強力な敵手となった。——これが文学史に記される一般的なハーマン像であろう。」との「ハーマンの思想と生涯」の著者川中子義勝氏の指摘のように、⁽¹⁾ゲーテ、シラー、ハイネらに比して、まことに手薄な扱いにすぎない。

彼は人間の自同律的思惟の産物である理論や体系を否定し、創造的な直観力を高く評価し、「合理主義の因果論は幻想にすぎず、神意により創造されたものを重視すべきだ」と主張するハーマンを「神に酔う人」との表現はまことに妥当した批評である。

ハーマンは同時代のイギリスの思想家D・ヒューム (David Hume 1711-76) の著述「人性論」(A Treatise of Human Nature 1739) からかなり強い影響を与えられたといわれている。

ヒュームは、啓蒙的合理主義の中心的思考である理性の観念に批判の眼をむけ、その著人性論において意図したのは、この理性の権威を打ち倒すことにあつた。ヒュームによれば理性観念とは、必然性、不可避性を意味しまた正邪善悪を判断する価値基準であると考えられている。しかし理性が必然性をもつ場合には限定がある。例えば数学にみられるように当初に自明の前提を定めておいて、それをもとにして次々と演繹を行なう場合である。

最初の前提が承認され、続く推論に誤りがない限り、結論は必然的にして不可避的なものとされうる。しかし最初の前提そのものが真理であるか否かはここでは問われない。

数学とは異なり、経験科学の諸観念を支えているのはいうまでもなく事実関係である。

事実間の関係は、厳密な論理的意味において必然的ではない。因果関係についてヒュームは、特定の事実の存在にともなつて、常に他の特定の事実が生起するとわれわれが言明しうるのは、数学における論理的必然性によるのではなく、これまでそうした事実間の結びつきが確実にくり返されたという経験によつてである。従つて現実に生起する事実と、その相関関係とを取扱う人文学や社会科学は、単にある命題から他の命題を引き出す数学的演繹的推論とは異なるのであり、理性の機能である必然性や不可避性は人文学等には妥当しえないとヒュームは考える。さらに合理主義の思考においては、理性は絶対的な価値基準、すなわち普遍妥当な正義、自由、善の観念を示すものとみなされ、人間行動一般を支配するものと考えられているが、ヒュームはこのような合理の思考を退ける。理性ではなく人間に不快、不快の衝動を起さしめる感覚が人間行動の支配者とされ、慣習 (Convention) の意義を評価する。人間の知識体系もそのような慣習を前提として構成されており、慣習が形成され維持されるのは、それが人間に便宜や効用を与えるからにほかならないと、ヒュームは啓蒙的合理主義の思考様式を批判したのである。このヒュームの思想はハーマンに正当に継承されたとバーリンはいう。

「デカルトの信念によれば、ア・プリアリな源泉からの演繹的な推論によって、現実に関する知識を獲得することが可能である。これこそハーマンによれば、近代における思惟の忌まわしい第一の誤謬である。この誤った教義を真に破壊した唯一の人物がヒュームであった。ハーマンは熱狂的に共感しながら彼のものを読んだ。実際、ハーマンの思想においては、聖書とヒュームという二つの根が奇妙に絡み合っているといっても過言ではない。

ヒュームははっきりと述べていた。われわれ自身や外界についてわれわれがもっている知識は、実は信念 (Belief) である。それはア・プリアリな根拠などにはもとづきえぬものである。どんな原理も理論も、つまり実践に関するものであれ、理論に関するものであれ、われわれの頭脳の最も理路整然とした精巧な構成物でさえ、つまるところ信念に帰着するのだ、と。……ハーマンの言葉でいえば、『われわれ自身の存在も、われわれの外のあらゆる事物の存在も、信じられねばならないのであって他の仕方によって確証されることはありえない。……信念は理性の所産ではない。それゆえ理性からの攻撃に敗れることもありえない。というのは信念 (Glauben) は味覚や視覚と同じく、根拠を通して生まれるわけではないからである。』とバーリンはヒュームとハーマンの思惟の共通性を指摘する。⁽²⁾

そして、バーリンはこの「ハーマンの反合理主義思想論」の結論として、次の所感を披瀝している。すなわち、「この物凄い非合理主義者 (ハーマン) のなした精神的洞察に、どのような固有の価値を認めうるかはともかく、思想および実践の歴史からみた場合、それは挑戦としての意義をもっていた。すなわち人間にとって中心的なすべての問題について、経験的にであれア・プリアリにであれ、解答してみせると豪語する科学に対して挑戦するべく投げつけられた手袋だったのである。つまるところハーマンが認めるのは、個人およびその気質だけである。ハーマンの考えによれば、どのような一般化の試みも、ノッペラボウの抽象概念をこしらえるだけである。しかも、そもそも個人こそが抽象概念にとっての原料であるにもかかわらず、仕上った抽象概念があたかも個人であるかのように誤解されて

しまうのである。したがって結果的には、そうした抽象概念によって提出される理論は、個人を記述するとか説明すると称しているだけで、その核心には触れていない。

法の体系も、道徳や美学の体系も、つまり活動に関するいかなる原理的定式も、結局は個人の経験から引き出されたものなのに、まさにその個人を黙殺してしまう。……彼は、数年後のバーク(E・バーク)と同様に次のように考えていた。生きた人間存在に対して科学的な基準を適用すれば、人間の真の姿が誤解され、最終的には恐ろしく墮落した人間観が生まれるだろう。つまり人間はたんなる質料として、物理学的・化学的・生物学的な因果関係の領域に属することになるだろう。」⁽³⁾と、ハーマンの科学への不信、合理主義への徹底した批判は、二一世紀の今日、多様な人間社会の諸様相において妥当な現象としてあらわれてきている。

註

- (1) 川中子義勝著「ハーマンの思想と生涯」一九九六年教文館刊一五―一六頁参照
- (2) I・バーリン、奥波一秀訳「北方の博士J・G・ハーマン―近代合理主義批判の先駆―」一九九六年みすず書房刊四二―四三頁参照
- (3) I・バーリン 奥波訳「前掲書」一七〇頁参照

四、ヘルダーについて

「ヘルダーの名声は、三つの連関した観念、ナシヨナリズム・歴史主義・民族精神(Volkgeist)の生みの親であり、古典主義・合理主義に抗し、科学的万能の信仰に対する、ロマン派反抗の領袖の一人であること——約めて言えばフ

ランス啓蒙思想家やドイツにおけるその亜流に対して最も畏るべき敵手であった事実——に基づいている。……また彼がハーマンからその反合理主義の哲学を学び、ハーマンを終生の師と仰ぎ、天才の人として尊敬し、教師たちのなかでも最も偉大な人物とみなし、ハーマンの死後にはその遺骨を予言者の聖遺物として大切にしていた。⁽¹⁾と、バーリンはヘルダーとハーマンの精神的連帯性について述べている。ヘルダーがナシヨナリズム、歴史主義、民族精神、すなわちドイツ・ローマン主義の契機を創り出し、啓蒙的合理主義の思惟様式を批判し、その師ハーマンとともにローマン派の祖といわれる彼独特の理念について、バーリンは次の三つの理念を指摘する。すなわち、その第一の理念は、人間が持ちうる諸能力を完全に行使して、可能性の極限にまで発展するには、それぞれ固有のものの見方、様式、伝統、歴史的記憶、言語を具備した共同体に属する必要があるということ。バーリンはこれを民本説または民衆帰属説 (Populism) と称し、共同体の存在価値を評価すべき態度と信念をヘルダーの理念の一つにとりあげる。第二の理念とは、人間の芸術、文学、宗教、哲学、法律、科学等々の精神活動は他の人びとと意志を通ずるさまざま形式のなかに存在する、ということ。すなわち、人間の想像活動とは、実用や娯楽や教化のための物の製作、外的自然界への改良と考えるべきではなく、個々人の生のヴィジョンの表現、それを告げる声、と考えるべきである。その声を理解するには、合理主義者のように、理性的な分析、すなわち構成要素に分解するのでも駄目なら、いくつかの概念の下に徹底した分類をしたり、一般原理や法則のうちに包括したり、論理的体系に組込んだり、技術的細工を用いても駄目なのであって、ただヘルダーのいわゆる感情移入 (Einfühlen) によってのみ可能なのである。ヘルダーのこの第二の理念を、バーリンは表現主義 (Expressionism) と称し、人間の行動は一般的に、とりわけ芸術活動は、個人または集団の全人格を表現し、全人格を表現している程度までしか周囲からは理解しえないという説であると解明する。次いでバーリンはヘルダーの第三の理念について述べる。もろもろの文明にはそれぞれ固有のものの見方、考え方、

感じ方、動き方があって、独自の理想を生み出しているのであるから、ある文明を正しく理解し判断するには、それ自身の価値観の尺度、思考、行動の規則をメドにしなければならず、どこかよその文明の尺度によってはならない。とりわけフランスの啓蒙哲学者たちが自由に駆使できると考えたらしい普遍的・超個人的・絶対的尺度を用いることは禁物である。

彼らはその尺度で、過去現在のあらゆる社会を傲慢不遜にも採点し、あれこれの個人・文明・時代をあるいはほめそやし、あるいはけなし、あるものを典型として持上げると思えば、他のものを野蛮・邪悪・荒唐無稽と抛棄したものである。過去を現代の光、あるいは全く無縁な光によって審判すること、ましてや軽侮することは、重大な歪曲を招かずには済まない。このヘルダーにおける第三の理念をバーリンは「多元論」(Pluralism)と称し、以上のヘルダーの思考にある三つの理念は、相互に絡みあっている、差異の中の統一、むしろ統一のなかの差異、「一」と「多」との緊張関係という考えは、ヘルダーにつきまとい離れぬ主導概念であった、とバーリンは指摘している。⁽²⁾このヘルダーの思惟構造が後代に与えた影響力についてバーリンは次のように指摘する。「ヘルダーは著作家として、豊かで、示唆に富み、微細にわたり、驚くほど想像力に富んではいたが、明晰、厳密、決定的であることは滅多になかった。彼の理念はしばしば混沌、時に撞着し、完全に明確なことは一度もなく、カントが不満を述べたのは失当ではない。しかし、彼の思想全体の核心にあるもの、後世の思想家、特にドイツ・ロマン派、そして彼らを経て、民本説、ナショナリズム、個人尊重主義の歴史全体に影響を与えたものは、彼が不断に回帰する主題、すなわち、一つの文化を他の文化の基準で裁いてはならぬ、異なった文明は異なった成長をし、異なった目標を追い、異なった生き方を現わし、生への異なった態度に支配されている、という主題である。それゆえ、これら諸文明を理解するには、『感情移入』と

いう想像力行為によってその本質に参入しなければならぬ。」⁽³⁾ というヘルダーの思索をベトーネンしている。さらにバーリンは別の個所で、「ヘルダーの教説が及ぼすべき結果は直ちには現われてこなかった。……その効果が十分に感じられるようになったのは、ロマン主義運動が最も昂揚して、旧秩序の依存していた理性とドグマの権威を顛覆しようとして企てた際である。その潜められた起爆力の及ぶ範囲が完全に実感を以て受留められるには、現代の反合理主義運動—ナシヨナリズム、ファシズム、実存主義、主情主義—の勃興、およびナシヨナリズムとファシズムの旗幟の下になされた戦争と革命、すなわち、われわれの時代を待たなければならなかったし、恐らく今日でさえなお完全には把握し尽されていないのである。」⁽⁴⁾ とのバーリンの感慨は、現代の秀れた思想史家としてまことに傾聴に価する指摘と言わざるを得ない。

註

(1) I・バーリン、小池訳「前掲書」二八一頁、なお、二〇世紀最大の理念史家と評されるドイツのフリードリッヒ・マイネッケは、その名著「歴史主義の成立」において次のようにヘルダーの自我感情をとりあげている。すなわち「ヘルダーの自我意識は、ある機械的な全体過程のなかで単に機械的に動くに過ぎない車輪とみなされることに反抗した自己の魂の奥底からの叫びが、天国から地上への叫びなのであった。……もともと啓蒙的合理主義哲学に対するヘルダーの激しい非難は、それが『日増しに徐々に人間に自らが機械であることを感じさせる』ように仕向けているという点に向けられていたのである。そしてヘルダーの反対標語は『心、温情、血、人類、生命』であった。これらの言語表現によって、飛躍した形ではあるが、ほかでもない彼にとつて個別の最も奥底の生から人類の歴史へ通じる段階が表現されていたのである。」と、マイネッケはヘルダーの人間観を見事に書き出している。

- (2) I・バーリン、小池訳「前掲書」二二—二五頁参照
(3) I・バーリン、小池訳「前掲書」三九五頁

五、あとがき

二〇世紀の思想史学の権威アイザイア・バーリンによってとりあげられ、現代に蘇生してきた一八世紀のヴィーコ、ハーマン、ヘルダーの三者の啓蒙合理主義批判の思想家たちの思想解明に関する研究ノートを閉じるにあたって、筆者の感想を「あとがき」として記しておきたい。⁽¹⁾デカルトの合理の哲学に真向うから対決しながら忘却の彼方に放り出されていたヴィーコ、ローマン主義の原点に立ちながら思想史の傍流からも外されていたハーマン、曖昧模糊なローマン主義者としてドイツ文学史の片隅に片づけられていたヘルダーらの反近代主義者、反合理主義者らを現代に甦えらせたアイザイア・バーリンは、二〇世紀の世界思想史学界の特筆大書すべき学者として、その業績は歴史の一面を飾るものであるといえよう。このバーリンの業績によって、合理主義から派生する機械文明、物質的科学文明による現代の病根が奈辺にあるかが鮮明に浮き彫りにされてきたからである。

近代合理主義の思惟の論理を基礎とした、ほぼ二五〇年余の科学・技術・機械文明の展開から派生してきた現代の病理現象は、今世紀の最大課題として人類の前に立ちはだかっている。人類をはじめとしてあらゆる生物にとっての重要課題は地球環境保全（エコロジー）の問題である。近年の情報によれば、南極の氷原にも亀裂を生ぜしめるような地球の温暖化現象、フロンガスによるオゾン層の破壊、酸性雨による自然原生林の枯渇、海水、河川の汚染、熱帯林の乱開発による著しい減少、砂漠化の増大、発展途上国における公害問題、有害廃棄物の処理問題、野生生物の加速度的減少、等々陸海空いづれの領域においても事態はまさに深刻である。この環境悪化に対処するため、一九九二

年六月に環境と開発に関する国際会議、いわゆる地球サミットが開催され、リオ宣言を中心に、それ以前のオゾン層の保全に関するウィーン条約、野生動物保護のワシントン条約、海洋環境保全のためのロンドン条約、マルポール条約等々によって約一七〇カ国の各国は協力しはじめてきている。しかし、先進工業国は一八世紀イギリス産業革命以来、自然環境保護など問題にせず、ひたすら近代化、工業化に邁進してきた。いまここで後進発展途上国に対して、開発を抑制し、自然保護を声高に唱えても、途上国からみれば、先進国のエゴイズムとしかみられないのである。この極端ともいふべき隔差を前提とし、先進工業国と発展途上国が協力してゆくには、先進国が従来の行過ぎを反省し、徹底した自戒の念を全世界に披瀝し、具体的に範を示してゆく以外に方途はない。「地球は群星のうちの一つの星である」との書出しに始り、地質、気候、鉱物、植物、動物の自然界を論じ、その自然風土論を根底に踏まえて「人間性論」に達し、その人間性論に呼応すべき文化論と、人間とエコロジーの関係を総合的に把握し、自然との共存関係の必要を強く主張したヘルダーの思考は、二一世紀の今日状況において、再検討さるべき重要な思想であるといわざるを得ない。

近年、わが国で「地球にやさしく」との標語がしばしば使われているが、この表現には、いまだに人間の傲慢さや驕慢さがあらわれている。「地球からやさしく」扱われる人間としての自覚をもちうるか否かに、地球的存在者としての人類の将来はかかっている。

いずれにせよ、二一世紀を迎えた今日の世界思潮において、科学と技術と機械に終始してしまった前世紀の精神状況を止揚すべき哲学思想が、緊急課題として渴望されていることに相違はない。二〇世紀の合理化、近代化、科学化、機械化、工業化の単なる継承であり、延長であっては人類に将来は保証されていないというべきである。この重大な岐路ともいふべき二一世紀初頭に、ヴィーコ、ハーマン、ヘルダーの三人の反近代主義者の諸思想が、アイザイア・

バーリンによって蘇生させられ復権してきたことを筆者は一種の啓示としてうけとめている。この三者の反合理、反近代の思考が現代の思想界においてどううけとめられ、どう評価されてゆくかが、二一世紀の世界思潮の動向を左右するとともに、人間と自然環境との関係を律することになると信じている。

註

(1) 従来、筆者は以下の論説において、ヴィーコ、ハーマン、ヘルダーの諸思想を論考してきた。因みにその論説を提示しておく。

「反近代思想の史的展開―ヨーロッパと日本―」平成三年横浜商科大学紀要第七巻、「ヘルダーと現代」平成六年横浜商大論集第二十八巻第一号、「ドイツ精神史における反近代主義」平成十年横浜商大論集第三十二巻第一号